

生きづらさを乗り越える社会関係資本

—愛知県豊田市「ミライの職業訓練校」に基づく事例分析—

市川 里穂

はじめに

はじめにでは、現代社会における「生きづらさ」を抱える人の増加が、個人の問題に還元するべきではなく、社会全体で取り組むべき課題であることを指摘する。

第一章 日本の「生きづらさ」をめぐる言説

第一章では、近年、「生きづらさ」は障害などマイノリティの属性を持つ人々だけでなく、健常者にも広がっていることを朝日新聞の記事検索の結果から示した。その例として、①若者の自殺増加、②引きこもりの増加、③孤立死の増加を挙げる。筆者が本稿の生きづらさ研究において特に注目するのは、貴戸（2011）が主張する「関係的な生きづらさ」の問題である。

第二章 社会関係資本の重要性

第二章では、生きづらさを解消するために、職場・地域・家族などとの繋がりを回復したり、代替したりするような繋がりとして「社会関係資本」に注目し、その機能を見ていった。社会関係資本とは社会的ネットワーク（人々のつながり）、また信頼や互酬性の規範として理解されている。筆者は、生きづらさを抱える人びとの苦しさを改善し、生き続ける力を醸成するためには、その人やその人が生きる場の社会関係資本の厚みを増すことが重要ではないかと考えた。

第三章 就労支援と社会関係資本

第三章では、職場との再接合を期する支援としての就労支援に着目し、支援の過程で生じる社会関係資本について考察した。政府による支援事業は、主体の側の意欲や

やる気の問題だという捉え方に問題があり、支援政策においても、いかに就職や就労継続へ導くかが目標（成功の指標）とされ、就労自立以外の「依存」の選択肢は十分に用意されてはこなかった。それらの点を考慮した、先駆的な就労支援事業を行う自治体として、釧路市・豊中市・静岡市の取り組みを挙げ、社会関係資本の観点から分析を行なった。

第四章 ミライの職業訓練校を事例とした調査研究の概要

第四章では、「ミライの職業訓練校」という愛知県豊田市の中山間地域にて実施されている、広い意味での就労支援事業を本稿の調査事例として取り上げた。「ミライの職業訓練校」は、地域内外から多様な属性の参加者が集まっている点に最大の特徴があるが、主催者たちの脱資本主義的な価値観に基づく思想や、安心して自分を語ることができる場にするためのルールの提示によって、運営側-参加者側、参加者同士の相互作用が上手くいっている様子が伺えた。

第五章 調査結果の分析と考察

第五章では、第四章の分析から、「ミライの職業訓練校」における参加者の語りは、聞き手によって「関係的な生きづらさ」として理解されると判明した。それが参加者の他者への安心になり、結果的に参加者同士の個人間や、地域に属する社会関係資本が醸成されていると思われた。就労支援分野において、支援者-被支援者の力関係の不均衡が課題となるが、「ミライの職業訓練校」では、社会関係資本を使用して、よりその点を上手く乗り越え、安心できる語り場の形成がされていると筆者は感じた。

終章 本研究のまとめと課題

本研究では、「ミライの職業訓練校」が人ととのつながりに着目した支援を行っているという点で、近年注目を集めている「伴走型支援」の理念を実現する、一つの事例となりうると本研究を通して確認できた。

筆者は、本稿で取り上げた事例のように、「女性」「障害者」など属性にとらわれないという意味での参加者の多様性があり、かつ「生きづらさ」を抱えた本人の自己責任・自己決定の権利を尊重するための居場所づくりが、公的な取り組みとしてバリエーションを持った実践となることを願う。

本研究では「ミライの職業訓練校」を取り巻く SC の調査結果について客観性を持た

せることに限界があった。本稿での知見をもとに、今後 SC の下位概念をまとめ、参加者や関係機関へのインタビュー調査を実施できたらと考えている。